

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

「倫理」

人間としての在り方生き方に関わる倫理的諸課題について多面的・多角的に考察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら、先哲の基本的な考え方等を手掛かりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては、倫理的諸課題について、倫理的な見方や考え方を働かせて、思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。

「政治・経済」

現代における政治、経済、国際関係等について多面的・多角的に考察する過程を重視する。現代における政治、経済、国際関係等の客観的な理解を基礎として、文章や資料を的確に読み解きながら、政治や経済の基本的な概念や理論等を活用して考察する力を求める。問題の作成に当たっては、各種統計など、多様な資料を用いて、様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 「比喩（たとえ）」をめぐる高校生同士の会話を契機として、哲学や宗教における比喩を手がかりに源流思想分野の知識や原典資料の読解力と応用力を問う。全体としては標準的な難易度であった。問1は、具体的な比喩の例を手がかりに、古代の思想・宗教に関する知識を問う設問である。基本的な内容ではあるが、選択肢の語句を正確に読み取る必要があり、やや難易度が高い。問2では、老子、ユダヤ教、イスラーム、仏教における言葉の役割についての知識を問う。基礎的な理解で解答可能であるが、正しい選択肢をすべて選ぶ形式で難問となった可能性があり、問題形式については改良の余地がある。問3では、資料を適切に読み取り、教科書知識と結び付ける応用力が問われる。二つの資料に同じ「無用」という語が含まれているが、莊子思想を正しく理解していれば解答できる、標準的な設問である。問4では、仏教とキリスト教を対比させながら、基本的な知識に基づいた資料の読解力が問われている。特に **b** について二つの資料と選択肢を丁寧に読む必要があるが、難易度は標準的であった。

第2問 全体を貫くテーマは、日本思想における「人間と自然の相関の中で生みだされる秩序」である。高校生二人が自身の興味関心をきっかけに調べを進め、読書会を行う学習場面を設定した。問1は、江戸時代の儒学者についての基本的な知識を問うた。正答の新井白石について「教科書の範囲を超えて」という評価を受けたが、これは教科書にも十分に記述がある。倫理の学習においては、時代状況や思想・著作の内容に習熟することを求めたい。問2は、日本の伝統的な自然観・世界観について問う問題であり、基本的な出題との評価を受けた。問3は、日蓮の思想や活動についての基本的な知識・理解を問うた。これも基礎的な内容の出題であった。消去法で解くのではなく、基礎的な内容について正答をきちんと選べるだけの学習を求めたい。問4は、資料（中井正一『美学入門』）から「秩序」についての捉え方を読み取る力と、資料内容と高校生二人の捉え方との関係を検討する論理的思考力を問うた。「資料の内容を注意深く読めば、趣旨を踏まえていなくても簡単に解答できてしまう」との評価もあったが、公民科倫理で扱うような抽象的な文章は、注意深く読み解き、論理的に整理していく力が求められる。そうした学習が学校現場でも行われることを期待しての出題であった。出題の意図は一定程度達成されたと考えている。

第3問 本問では、学習指導要領に掲げられる「主体的・対話的で深い学び」を主題に取り上げた。

「主体」および「対話」はともに、哲学史の中で理論・実践の両面から探究されてきた概念である。このことを踏まえ、本問では全体を通じて、「主体的・対話的で深い学び」という理念を実現していく高校生の学びのプロセスが、対話による共同探究の活動を介した主体の態度変容といった実践的な在り方につながることを考えてもらうことを目指した。その際、高校生が「主体とは何か」について疑問をもち、それに関する対話を通じて新たな考え方や態度を獲得していく構成にした。「探究型授業や主体的な学びの実践を求めるメッセージ」と肯定的な評価を受けた。全体の難易度はやや高いとの指摘も受けた。問1は、ベーコンの4つのイドラに関する知識を日常生活の場面に適用して考える能力を問う事例問題である。4つのイドラは単に知識として覚えるだけでなく、身近な具体例にまで踏み込んで理解してほしい。問2は、実存としての主体に注目したキルケゴールについての知識問題である。問3は、ホルクハイマーとアドルノの思想についての知識問題である。問4は、パースの資料と、それに影響を受けた「子どものための哲学」の資料の読解問題である。プラグマティズムと哲学教育の結びつきは密接であり、二つの資料を組み合わせで出題できたことには意義があると考えているが、選択肢が平易であるとの指摘を受けた。

第4問 全体のテーマは、行為や制度の道徳的な是非に関する判断の基準と、行為者や制度の意図の内容との関係である。同じように悪い結果を招くと予想できる行為であっても、その結果が意図されていたかどうかによって、行為に対する道徳的な評価は変わってくるとの見方がある。この見方について、資源の無駄遣いのような日常事例から、積極的差別是正措置や尊厳死の是非といった社会問題まで、具体的事例に即して理解し、考えてもらうことを趣旨とした。以上の趣旨ととくに関係が深いのは、問3と問4である。加えて、青年期の心理、生命倫理の分野からも出題した。問1は、心理的適応についての教科書知識を問う問題。問2は、終末期医療の倫理に関する教科書知識を問う問題で、平易ながら重要な問いだと評価いただいた。問3と問4は、大問の趣旨に沿った設問とした。問3は教科書には出てこない思想家（アンスコム）の資料を提示して、意図や道徳について述べた選択肢の正誤を組合せて答えさせる問題である。選択肢の文章は、資料の文章から論理的に導ける内容になるよう工夫して出題したつもりだったが、資料から選択肢の内容を読み取るのは難しいのではないかと評価をいただいた。問4は、リード文ⅠとⅡの理解から論理的に導ける内容の文章を選ばせる設問である。大問全体の趣旨について思索を深めさせる良問だと評価いただいた。

第5問 生徒が市民講座に参加し、講義から学んだことや講義をきっかけに調べたことについて各小問を展開するという場面設定とした。将来にわたる重要な課題である国債の累増や循環型社会、労働力不足、国際競争力の低下などに関わるテーマを積極的に取り上げるとともに多様な資料を用いたり、会話文形式で出題したりして、知識の理解の質を問う問題、思考力・判断力・表現力等を発揮して解く問題を多く取り入れた。問1は、国富という概念を理解しているか、そしてそれが実際の統計中のどの数値と対応しているかを、問題文・表を参照しながら読み解くことができるかを問う問題である。問2は、循環型社会を形成していくために必要な取組みのうち、3R（リデュース・リユース・リサイクル）に関する具体的事例を図と対応させて考えることができるかを問う問題である。問3は、財政再建派と積極財政派のそれぞれの立場から書かれた新聞記事を読解し、それぞれの立場の論理・論拠がどのようなものであるかを、両論を比較対照しながら論理的に考察できるかを問う問題である。問4は、WTOの多国間主義とFTAやEPAの進展及びこれらの関係性に関する会話文を読みながら、日本の貿易自由化の経緯に関する基礎知識があるかどうかを問う問題である。問5は、地域的経済統合と日本の国際貢献に関する基本的な知識や、昨

今結びつきを強めている日本とASEANの経済的な交流や日本の発展途上国への援助についての理解を問う問題である。問6は、豊かな福祉社会の実現に関わる基本的な知識を、外国人労働者の受入れをめぐる具体的な課題に引き付けて考察できるかを問う問題である。全体の難易度はやや低かった。

第6問 大学のオープンキャンパスを場面として設定し、消極的平和と積極的平和の双方について、それぞれの平和の現状と対応を考えてもらう出題とした。教科書の「日本国憲法の基本原理」と「現代の国際政治」にまたがる分野を有機的に関連づけて理解するよう促すことを目指した。問1は、日本国憲法における象徴天皇制の制度についての知識と理解を問う問題である。問2は、PKOや武力紛争後の復興に関する基本的知識を前提として、メモの内容を踏まえつつ、各国のPKOへの部隊派遣人数について記された複数の表の年代順を正確に判断できるかを問う問題である。問3は、国会の制度についての知識を問う問題である。問4は、日本の差別問題への対応のための立法についての知識を問う問題である。問5は、人権関連条約についての基本的知識を前提にして、人権保障に関する取組みの現状を理解できているかを問う問題である。問6は、「南北問題」や「南南問題」についての基本的知識を前提にして、世界の経済格差の歴史的背景や現状を理解できているかを問う問題である。全体の難易度は高かった。

第7問 戦後の日本経済は、高度成長期、安定成長期には高い経済成長を実現したのち、1990年代以降は長期の低成長に陥っているが、その背景には、1990年代以降、グローバル化の中で新興諸国からの競争圧力が高まる中で、次代を担う新産業の発展が十分ではなく、産業構造の高度化も順調には進んでいないことなどが、重要な要因となっているといえる。このような現状を理解するとともに、それを変えていくためには何が必要かを考察する出題とした。問1は、知的財産権の保護の根本的な理由を、様々な立場から考察することのできる力を問う問題である。問2は、企業の海外進出が、母国の輸出や輸入の動きにどのような影響を及ぼし、その結果としての貿易収支の動きにどのような影響を及ぼしうるかを問う問題である。問3は、新産業を育成する上で重要な役割を果たすベンチャー企業の現状や、その育成のために日本ではどのような政策や取組みがなされているかを問う問題である。問3は、イノベーションを推進するための法制度や時事的な政策を包括的に把握することのできる力を問う問題である。全体の難易度は、やや高かった。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

「倫理」分野と「政治・経済」分野の全体について、「出題内容は、学習指導要領に掲げられた教科・科目のねらいや内容におおむね則しており、いわゆる難問・奇問とされる問題はみられず、高校生が学習した知識や技能、涵養した思考力や判断力に基づき、考えて解いていく工夫が施された標準的な問題である」、「問題作成に当たっては、大問ごとにリード文などをおして大問で問う分野や領域を示し、基礎的・基本的な知識の確認と、習得した知識や技能を用いて思考力や判断力を働かせてその分野や領域への理解を完成させる工夫が求められるだけでなく、一定の平均点を確保し、試験実施時間内に解き終わることや高等学校での学習への影響を考慮するとともに、これから大学に進もうとする有為な若者へのメッセージを織り込むことなど、多くの努力を要したものと推察する」と評価された。

「倫理分野」に関して、高等学校教科担当教員からは、設問数や分量は「適切」であり、難易度も「適切」だとコメントいただいた。また、「ほとんどの大問・小問が高校生の間の会話を基点とし、そこから原典資料の読み取りや読書会、さらには哲学対話へと活動が広がる構成となっており、「倫理」で求められる本質的な学習活動を幅広く登場させた設定といえる」と評価された。

教育研究団体からは、「高等学校で習得する知識・技能と習得した知識・技能を用いて思考力・判断力を働かせて問題を解いていくことをとおして、これから大学で学ぼうとする高校生が身に付けるべきものの見方や考え方を示して」おり、「難易度も標準的である」と評価いただいた。

全体として、試験問題の内容・範囲、試験問題の分量・程度、試験問題の表現・形式等について妥当と評価いただいたことは、適切な問題作成ができたとして肯定的に自己評価したい。ただし資料の量や使用の仕方については、さらなる工夫を求めるいくつかのご指摘があったので、改善に努めたいと考える。

「政治・経済」分野に関して、第5問は、大学教員による市民講座のプログラムを示し、その内容に関する問題を設けるという形式であった。こうした問題の形式については、「出題者から高校生へのメッセージとして経済分野に関するリード文を示すべきだろう」との指摘があった。幅広い内容について出題する必要からこの形式となったが、指摘のとおりリード文が示されないことになった。指摘を踏まえて、リード文を用いたり、他の形を工夫したりして、メッセージを示すことができるような出題の形式を今後検討していきたい。各設問の内容ないし難易度については、おおむね「標準的」あるいは「全体としての難易度はやや平易」との評価であった。設問ごとの難易度の適正化を図るよう努めたい。

第6問は、平和について問う問題である。大問の導入部分の形式は、生徒が参加したオープンキャンパスでの模擬授業の概要を箇条書きにしたものを示すものとなっているが、この形式に関しても、前の大問と同様に、「大学入学共通テストとなってからリード文に大学からの明確なメッセージのある文章を示すことがなくなったのは高校生の学びにとっては痛手である」、「模擬授業の概要が示されただけでは、そこから学問としての『平和』を読み取るのは難しい」との指摘があった。全ての問題の大問の導入部分を文章とし、これを読むことを求めることは、限られた時間の中で問題を解かなければならない受験者に過大な負担を課すことにもなるが、出題者からのメッセージをより明確な形で示すことは必要であり、今後工夫を重ねたい。差別解消に関する設問である問6について、誤文を選択させる形式となっていることに関し、「出題内容を考えれば誤文を選ぶ設定にしなければならなかった理由もわかる」が、「そこまでして出題のリスクを冒しても出題すべき内容だったのか疑問が残る」との指摘があった。差別解消は現代社会の重要な課題であることから、これに関する問題を出題したが、誤文を選択する形式の問題が多くならないように注意したい。

第7問は、「産業構造の変化と日本の経済・社会の課題」に関する問題である。この問題については、「『課題の設定』、『資料の収集』、『整理と分析』とその相互の関連、『まとめと発表』という、探究の概要を示した図を題材としており、生徒の探究の在り方のモデルケースを示している」、「日本経済が長期にわたって陥っている低成長の状態から脱出するために必要な取組みを、多面的・多角的に考察させる問題であり、資料の読み取りをとおして思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問もある」と評価された。生徒の探究の在り方のモデルケースとする出題の形式を今後も工夫し、思考力や判断力等を問う上で適切な問題をより多く出題するよう努めていきたい。

4 ま と め

「倫理」分野についてのまとめは以下のとおりである。

高等学校教科担当教員から、「授業での探究的な学びをきっかけにして、生徒が図書館を活用したり、哲学対話の会を開催したりする過程を踏まえて設問が構成されている点に、主体的な学びを求めるメッセージが読み取れ、高等学校等における授業改善に資する問題作成であった」と評価いただいた。基本的な知識の確認、思考力・判断力・表現力等を問うこと、高校生の学びの指針となる

だけでなく高校生へのメッセージとなること，教育現場における改善に資するような資料を活用することなどの課題をさらに充実できるよう，今後も取り組んでいきたい。

「政治・経済」分野についてのまとめは以下のとおりである。

全体としては，学習指導要領に則して「政治・経済」の全分野にわたり，基礎・基本を重視しつつ，知識・技能の定着状況を確認する設問，多面的・多角的に考察させる設問，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことを求める設問など，共通テストに求められる水準の問題を作成できたと判断している。

さらに良質な問題を作成するために，今後の問題作成に当たって引き続き留意すべき点もある。上でも述べたが，「政治・経済」分野の大問のうち，リード文で文章を示す形式の問題がなかった点は，今後検討していくべき課題である。出題分野の偏りをなくすとともに，受験者に過度の負担を課さないという条件を満たしながら，大問中の設問間の関連や出題者のメッセージがより明確に示せるような出題の在り方を引き続き検討していきたい。